

図工・美術

好き嫌いについて考える

今号では、これまであまり本誌で取りあげたことのなかったであろう、図画工作、美術について考えてみたい。

好きな教科は図画工作？ 嫌いな理由は上手？ 下手？

まずは、総研が毎年調査を行っている「小学生白書2023」で、子どもたちが図画・工作や美術という教科をどのように捉えているか見てみたい。

〈小学生・好きな教科〉

1位体育(21・7%)

2位算数／図画工作(同率17・7%)

絵を描いたり工作をしたりする、いわゆる創作活動は子どもたちの人気も高く、体を動かす体育に次いで、算数と同率2位となっている。

ところが、これが中学生になると様相がガラリと変わる。

〈中学生・好きな教科〉

1位数学(21・3%)

2位英語／保健体育(同率12・5%)
3位美術(5・2%)
中学生になると、「美術が好き」という生徒の割合はぐっと低くなる。

図画工作のような、クリエイティブな教科が好きと答えていた子どもたちの割合が、なぜここまで減ってしまうのだろうか？ 中学生ともなると、高校進学を控えて数学や英語といった教科への関心が高まるのはよくわかるが、このように順位が変わる教科は、ほかにはないのではないか。

試しに周囲の同僚に聞いてみると、美術が苦手だったと答えたその理由の多くは「絵が描けないから・下手だから」であった。

しかし、学習指導要領などでの教科の評価基準に「上手・下手」という指標があるだろうか。他の教科同様、評価すべきは児童生徒がいかに主体的に学びに取り組んでいるか、である。

だが残念ながら、図画工作や美術という教科において好き・嫌い、得意・不得意を左右するのは「絵がうまいかどうか」のようである。

小学校5年生がターニングポイント

白書の表を見ていただくとわかるように、実は図画工作を好きな児童の割合は、小学校5年生頃を境に大きく変わっていく。これは、学校の教科だけの傾向ではなく、絵画教室やアートスクールといった美術系の習い事でも同様の様相をみせるという。

弊社グループの社外取締役で美術家の城戸真亜子氏は、自身が主宰するアートスクールに通う子どもたちにおいてもその傾向がある指摘している。

「——小学生になると少しずつ、子どもたちは造形の楽しみから離れていってしまいます。中学生になっても続けられる子はひと握り。：(中略)：子どもたち自身『描くことが、前ほど楽しくないんだ』というのです」(城戸真亜子著「子どもたちはアーティスト」より) なぜ、子どもたちが造形の世界から離れていくのか？

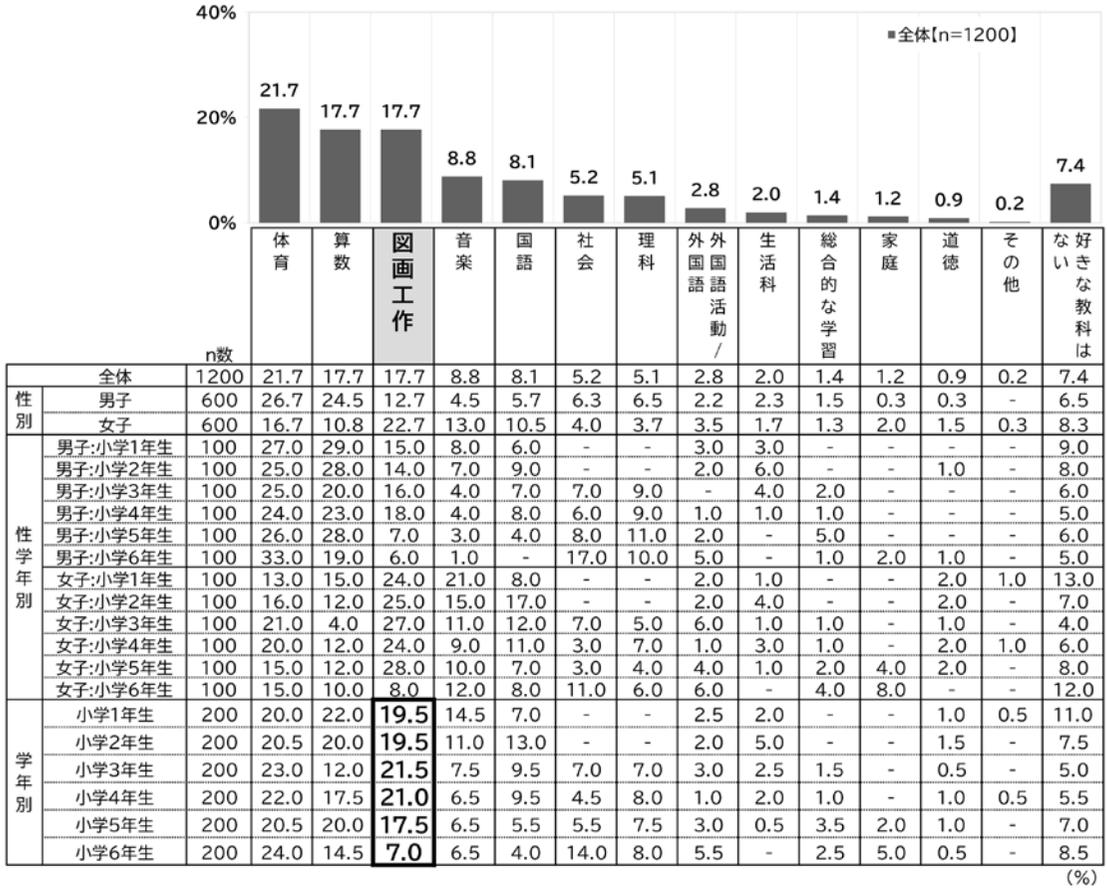
その理由の一つに城戸氏は子どもの認知能力の発達を挙げている。10歳頃になると、空間認識力が高まり、周囲の状況を客観的に比較し批評できるようになってくる。

このとき、周りの子どもや教科書に出てくるような作品と比較して「自分はその子より／この作品より下手」「ものを描いているのに、本物のように描けない」と判断してしまおうという。

この反応は子どもの成長の証しとして喜ぶ

図1 小学生白書 2023 「好きな教科」

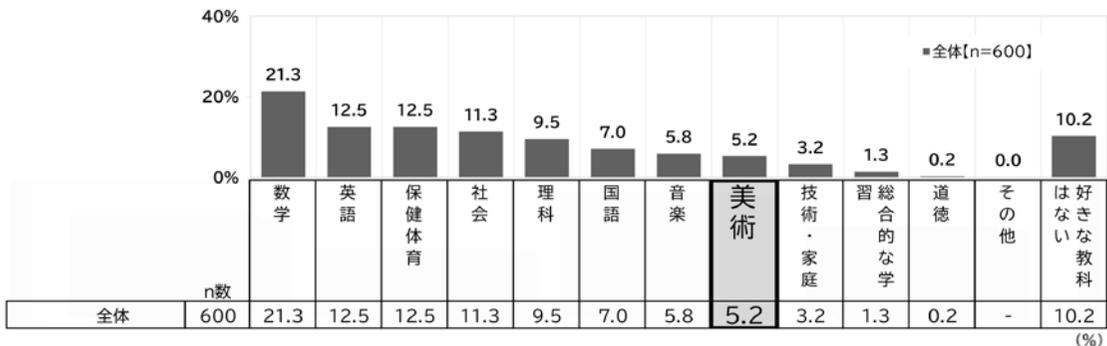
◆一番好きな教科は何ですか。



(%)

図2 中学生白書 2023 「好きな教科」

◆一番好きな教科は何ですか。



(%)

べきことなのであろう。その反面、なにか長じて人としての楽しみや将来への希望・機会を手放してしまっているようで残念にも感じる。また、さらに気になるのは美術造形に対する評価が「上手・下手」、誤解を恐れずに言えば「ホンモノそっくり、すごい！」という基準しかないと思込んだまま成長してしまうのではないか、という不安がある。

先生たちも美術が苦手？

ここに一つ、興味深い研究報告がある。小学校教諭になるべく学んでいる教育学部の学生157名に行った調査報告(※1)である。

学生に図画工作(以下、「図工」とする)について聞いたところ、約3割の学生が「嫌い」と回答したという。

その原因は主に「小学生時代の先生の言動」(嫌いと回答した学生の74%)と「不器用で絵が下手だから」(同44%)の二つに集中している。

どちらも自分の子ども時代の経験が図工という教科に対する認識を形作っており、その結果、図工の評価は「うまいか下手かで決まる」つまり、「完成作品の出来栄え」が評価の基準であると思いついて指摘している。

本来、学習評価の基準は、児童自身がいか

たどりに着くか等の過程にあり、そのために一人ひとり見取って評価していくものであるが、図工に関しては、誤った「図工観」がまだまだ払拭されていないのでは、と研究者は指摘している。

初等教育、特に小学校低学年では、クラス担任が図工の授業を担当する。

誤った図工観のもとで行う授業は、図工が苦手な先生にとっても、子どもにとってもつらいことに違いない。

それにしても、なぜ美術教育においては「本物そっくり／絵がうまい」という見た目が評価対象になると思ってしまうのだろうか。

それを知るには、日本に美術という概念、ひいては美術教育が導入された時代に遡ってみる必要があるだろう。

日本の美術教育はどこから始まったか

そもそも「美術」という概念は、どこから出来上がってきたのだろうか？ それは明治維新後にヨーロッパからもたらされた概念であり、美術教育も明治5年(1872年)の学制公布から始まる。

当時の図画工作科や美術科に近いものは「^{けい}野画」「^が画学」という、幾何学図法や透視図法などを学ぶ野画と、「臨写」と呼ばれる、いわゆるお手本を見て描き写す画学が挙げられる。野画は製図や測量図を書き起こすための科目に近く、画学のほうが図画工作などに近い教科だったようだ。

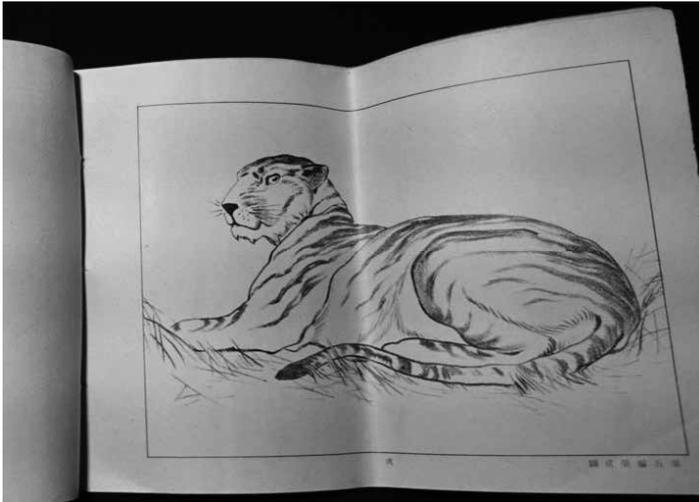
しかし、箱の図面やお手本を描き写すだけでは到底芸術教育とは程遠く、欧州視察から帰国した思想家の岡倉天心らを中心に美術教育の見直しが進められた。

西洋化を推し進めるあまり、鉛筆のみでの描画になっていたところを、狩野派の絵師に手本を描かせ、毛筆で臨写させるなどの試みがなされた。

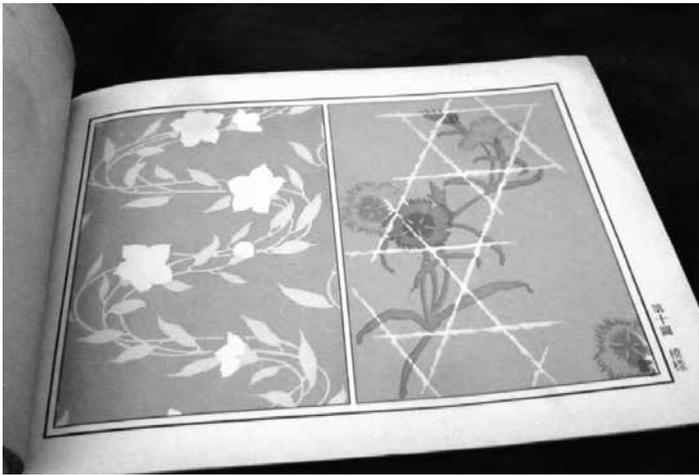
やがて、「鉛筆画帖」「毛筆画帖」とともにアメリカの教科書である「Text of Art Education」を下敷きとした「新定画帖」が編纂される。新定画帖は、国定教科書として明治43年から昭和6年(1910)1931年)まで使用された。カラー版になり、もの見方、描き方などが難易度順に示されており、作例も充実していた。また、自在画という概念を取り入れ、写生を推奨、さらにデザインの概念にも言及した画期的な教科書だったようだ。

ところが、教育の現場ではまだまだ臨写の存在が大きく、新定画帖の意図を十分にくみ取ることができなかった。

明治初期、ヨーロッパではすでに印象派やキュビズムが生まれ、大正期には抽象表現主義、シュルレアリスムといった新しい考え方や表現による作品が次々と発表されていた。日本でもその影響を受けて「重要視すべきは児童・生徒の自発的な自己表現である」(1918年/山本鼎)と主張した「自由画運動」などが起こった。



中等臨画手本 第五編（明治33年発行）…写真は鉛筆手本か。牛、馬、虎のほかにも、運動会、陸軍士官などの絵を掲載。世相が伝わる。



「新定画帖」（明治43年～）…学年ごと、男女別、男女共用などいろいろな版があったようだ。写真は「模様」とあり、考案画のページと考えられる。

つまり、それまではずっと上手に描かれたお手本を描き写すことを学んできたのだといえよう。上手に描くと褒められる、そんな経験を私たちは無意識のうちに連綿と引き継いできてしまったのではないか。

子どもの主体性、意欲を評価する

時代が下り、戦後初1947年に学習指導要領（試案）が公開された。しかし、図画工作の目的は、わりと曖昧なままだったようだ。

「楽しく絵で（彫塑で）表す」という表現が記載されている時期もあるものの、「表す」といった表現では、どこに主眼をおいて評価をすればよいのかわかりづらいし、「楽しくできていればよいのか」という疑問も出てきたであろう。

その後「自ら考え行動する力」「生きる力」など、子どもの主体性を育てる観点がより明確になってきた。しかし、現在でも、「図工や美術は出来栄ではない」といわれすぎて

に理解できる人は少ないように思う。このような状態で評価の軸を「子どもたちの主体性」に据え、子どもを見守り、その力を引き出していくことは図工のような正解のない教科では難しいのだろうか。

いや、はじめから正解がないとわかっていれば、むしろ子どもたちは、自分でいろいろな方法を考え出し、試して、必要とあれば技術を学び、自分なりのスタイルを編み出していくのではないだろうか。

図工の評価は「上手・下手」ではない。「子どもたちが興味関心をもって主体的に活動できる」か否かである。このこと自体は30年近くずっと学習指導要領でもいわれ続けてきていることである。にもかかわらず、その手前に立ちはだかる、見た目（完成評価・出来栄評価）の壁のいかに高いことか。

この壁がなくなるとき、子どもだけでなく、我々おとなも、のびのびと発揮されたその才能を先入観なく受け入れられるのではないかとと思う。

中学生白書の「好きな教科」のデータをみつつ、「子ども主体」の図工、美術になることで、美術に親しんでくれる子どもたちが少しずつ増えてほしい、と筆者は期待しているのである。